

# ホサンナにおけるハディーヤ語調査の概要\*

二ノ宮崇司

(筑波大学・日本学術振興会特別研究員)

s0430062@u.tsukuba.ac.jp

## 1 はじめに

筆者は2009年12月25日から2010年1月10日にかけてエチオピア連邦民主共和国のハディーヤ・ゾーン (Hadiyya zone) の中心地ホサンナ (Hosaina, Hossäyna) でハディーヤ語 (Hadiyya) の調査を行った。それはハディーヤ語の音声と文法を記述し、ハディーヤ語の辞書、音声コーパス、文字テキスト、さらにはハディーヤ語母語話者のための日本語の教科書を作成するための足がかりである。筆者自身が収集録音したデータからハディーヤ語の音声と文法の記述をする前に、先行研究がどのような記述を行って、そこにどのような問題点があるのかを調査したい。これが本稿の目的である。また、筆者自身がホサンナで行った社会言語学的調査の報告も行いたい。

第2章ではハディーヤ語の概要を、第3章では先行研究が提示した音声と文法体系を示す。第4章では先行研究の記述から見えた問題点を示し、第5章では調査方法を示す。第6章では社会言語学的調査を報告する。

---

\* 本調査は平成16～22年度科学研究費基盤研究(B)「オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築」代表：乾秀行(山口大学)(課題番号16401008, 19401023)によるものである。調査に至る過程でインフォーマントのBL氏をはじめ、柘植洋一先生(金沢大学)、Mulugeta先生(アジス・アベバ大学)、Meki氏にはご助力いただいた。また、アムハラ語のことで、柘植洋一先生、若狭基道先生(明星大学)には、ご相談にのっていただいた。これらの方々に感謝申し上げたい。ハディーヤ語の文献の略号は次の通りである。PB = Plazikowsky-Bauer (1960), H = Hudson (1976), S = Stinson (1976), K = Korhonen et al. (1986b)。それ以外に本稿で用いる略号は次の通りである。sg. = 単数、pl. = 複数、m. = 男性、f. = 女性、

## 2 ハディーヤ語の概要

ハディーヤ語は地理的に南部諸民族州のハディーヤ・ゾーン (Hadiyya zone) だけでなく、同州のグラゲ・ゾーン (Gurage zone) とカンバタ・ゾーン (Kambata zone) などにも分布する (地図は図 1 を参照)。系統的にアフロ・アジア諸語、クシ諸語、東クシ諸語、高地東クシ諸語に属する。方言は柘植 (1992: 181) によればレーモ (Leemo) 方言 (ホサンナを中心とする地域)、リビド (Libido) 方言 (ホサンナの北のマラコ (Maraqo) 地域)、シャシャゴ (Shashago) 方言 (ホサンナの北東地域)、ソロ (Soro) 方言 (ホサンナの南東地域) の 4 つに分かれるという。ハディーヤ語には、Hadiyya 以外の名称として、Hadiya、Adiya、Gudella、Gudeila がある (柘植 1992: 181)。話者人口については第 6 節で述べる。

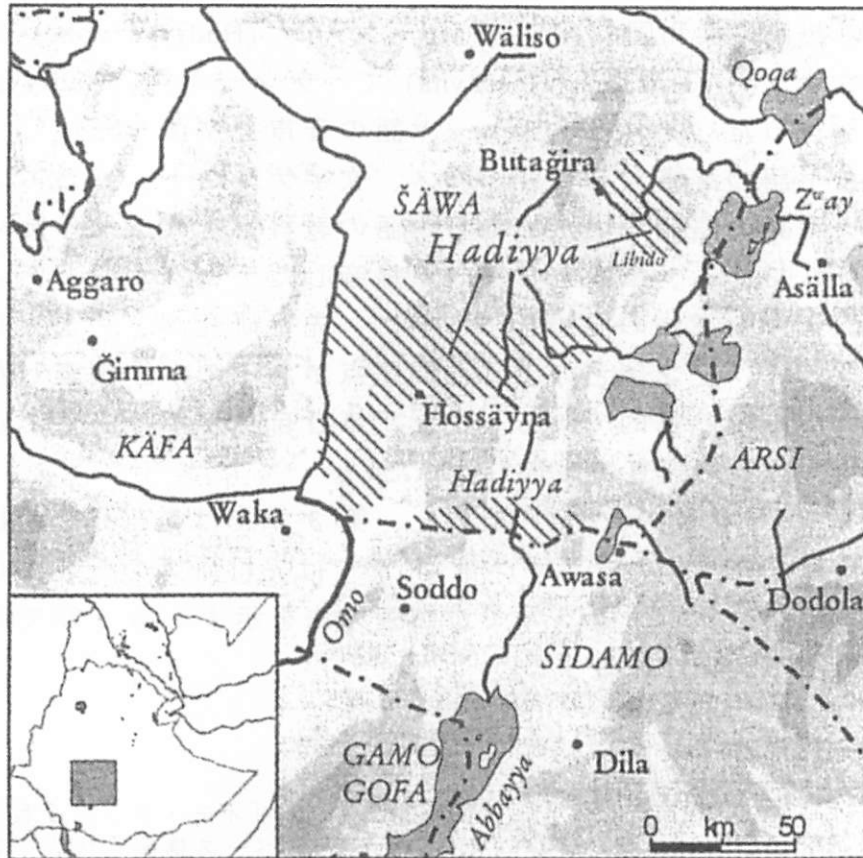


図 1 : ハディーヤ語の分布地図 (Crass 2005: 961)

pol. = 丁寧、# = 語境界。

### 3 先行研究

1976年以前の研究状況については、柘植(1992: 181)で述べられているので、本稿ではそれ以降の研究状況を確認する。Hudsonは語彙集(1989)と形態論のスケッチ(2007)を発表した。そして、Korhonen et al.(1986a, 1986b)はハディーヤ語の約300の基礎語彙と簡単な文法のスケッチを発表した。Ronald James Simは子音の問題を音響的に調査した論文(1988)、動詞の歴史的変化に関する論文(1988)を発表した後、1989年に博士論文である*Predicate conjoining in Hadiyya: A head-driven PS Grammar*. Ph.D. dissertation, University of Edinburgh. (筆者未見)を発表した。その後も動詞に関する論文(1991)を発表した。その他、Wolf Leslauによる子音の歴史的変化に関する論文(1985)、Denise Lesley Perrettが2000年に発表した博士論文*The dynamics of tense construal in Hadiyya*, Ph.D. dissertation, University of London. (筆者未見)、筆者による音声レベルでの基礎語彙の記述(二ノ宮2008)などがある。以上のように、少しずつハディーヤ語の研究が進められているが、音声、音韻、形態、統語、談話などを包括的に記述した研究は未だ存在しない。分野別に見ると、文法については博士論文が2本出されているが、音声の研究は音韻論の一部として扱われる程度で、文法研究ほど活発ではない。特にプロソディーの記述は先行研究で大きく欠けている。

#### 3.1 音声学と音韻論

二ノ宮(2008)ではPlazikowsky-Bauer(1960)<sup>1</sup>, Hudson(1976)<sup>2</sup>,

<sup>1</sup> Plazikowsky-Bauer(1960)は次のような目録を想定している。i, e, a, o, u, p, b, t, d, ɔ, k, g, ʔ, m, n, r, f, v, s, z, ʃ, ʒ, h, č, ġ, w, y, l, p̣, ṭ, ḳ, ġ̣である。これは、半ば音素目録、半ば音声目録と言える。Plazikowsky-Bauer(1960)のgはgであり、破擦音č, ġ, ġ̣はHudson(1976)のc, j, c'に対応するものと思われる。ʔは声門破裂音である。長母音は(ː)の記号を母音の上に置くことによって、表される。aの長母音は, āである。なお、eには超短のėも見られる。また、āのように母音の上に(ː)の記号が置かれることがあるが、Plazikowsky-Bauer(1960)はこれについて何の説明も与えていない。しかし、Plazikowsky-Bauer(1960)の例を見ると、(ː)の記号がある時、一語中にアクセント記号である(ˑ)が置かれることはない。(ː)は何らかのプロソディー記号であると思われるが、詳細不明である。

<sup>2</sup> Hudson(1976)の音素目録は次の通りである。i, e, a, o, u, b, t, d, k, g, ʔ, m, n, r, f, s, z, ʃ [ɕ], h, č [tɕ], j [dʒ], w, y [j], l, p', t', k', c' [tɕ']。長母音は母音を重ねることによって表される。

1989, 2007)<sup>3</sup> をもとにハディーヤ語の分節音・子音連続・プロソディーの記述内容と問題点をとり上げたが、本稿は Sim (1988) の分節音・子音連続の記述内容を 3.1.1 と 3.1.2 節でまとめる<sup>4</sup>。

### 3.1.1 分節音

表1 と表 2 に、Sim (1988) の母音と子音目録を提示する。なお Sim (1988) は母音が長い時、母音を重ねる。

表 1: ハディーヤ語の母音 (Sim 1988: 78)

i		u
e		o
	a	

表 2: ハディーヤ語の子音 (Sim 1988: 78)

Hadiyya	両唇音	唇歯音	歯茎音	後部歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	b		t d			k g	?
鼻音	m		n				
ふるえ音			r				
摩擦音		f	s z	ʃ			h
破擦音				c j			
側面接近音			l				
接近音					y	w	
放出音	p'		t'	c'		k'	

### 3.1.2 子音連続

Sim (1988) は 2 子音連続と 3 子音連続の時間長を音響音声学的に記述した。ハディーヤ語で 2 子音が連続することは珍しくないが、3 子音連続は次のような環境で見られる。

- 語中の場合：-lld- (?aalldu 「なめよ」) / -wwd- (haww- 「悩ませよ」) / -yyd- (?iyydu 「運べ」) / -ssd- (massdu 「手に取れ」) /

<sup>3</sup> Hudson (2007) の音素目録は Hudson (1976) と同じである。ただし、g が g となっていたり、破擦音 c, j, c' が ʃ, j, ʃ' となっていたりと、表記が若干変更されている。

<sup>4</sup> Stinson (1976: 148-149) は音韻論の項目を立てているが、音素目録を提示していない。ここでは、Stinson (1976) の表記の注意点を述べるに留める。破擦音 c, j, c' は Hudson (1976) の c, j, c' に対応する。長母音は (:) の記号で表される。

また、Korhonen et al. (1986a, 1986b) も音素目録を提示していない。表記の注意点として、長母音は母音を重ね、声門破裂音は (') の記号で表される。無声破擦音・有声破擦音・放出破擦音は Hudson (1976) と同様、c, j, c' で表される。

-ššd- (daššdu 「膨らめ」) / -nnd- (fikkanndu 「数多くあれ」) /  
 -mmd- (t'ummdu 「平和であれ」) / -tt- (?iittdu 「愛せよ」) / -ccd-  
 (baccdu 「きれいに磨け」) / -kkd- (?akkdu 「育てよ」) / -bbd-  
 (gabbdu 「分解せよ」) / -ddd- (badddu 「恐れよ」) / -ggd- (c'oggdu  
 「干しあがれ」) / -ppd- (?app'du 「燃えよ」) / -tt'd- (k'ott'du 「強  
 くあれ」) / -?md- (ga?mdu 「噛め」) / -nt'd- (?unt'du 「弁護せよ」)  
 / -?ld- (?osa?ldu 「笑え」) / -nnd- (ginndu 「破壊せよ」) / -nsd-  
 (c'iinsdu 「ジュースを絞れ」) / -nšd- (?aanšdu 「洗え」) / -?yd-  
 (ha?ydu 「嫌え」)

●語末の 2 子音連続から次の語頭子音にかけて：-?l#g-  
 (k'erraa?l#googo [k'e:ra:ʔlgo:go] 「長い道」) / -ll#b-  
 (biijaall#beeto [bi:dʒa:l:be:t<sup>h</sup>o] 「優しい少年」)

上の例を見ると、語中で 3 子音が連続する場合、その最後の  
 子音は -d- であるが、これは命令法・希求法の強調形 -du の一  
 部である。Sim (1988: 86) は -ddd- のように同じ子音が 3 回連続  
 する事例を示しており、その持続時間は 193msec であるという  
 が、それ以外の音声的実体は不明である。また、Sim (1988: 86) に  
 よれば、-nt'd- は音声的に [nʔd] であるというが、語中の放音  
 がどのような音声的実体を伴うものなのかも不明である。

## 3.2 形態論

ここでは Plazikowsky-Bauer (1960), Stinson (1976), Hudson  
 (1976, 2007), Korhonen et al. (1986b), Sim (1988, 1991) の形態論  
 をまとめる。対象は紙面の都合上、名詞、指示詞、人称代名詞、  
 動詞に絞る。

### 3.2.1 名詞

名詞において数・性・格が区別される (Stinson 1976: 150-151,  
 Hudson 1976: 251-254, Hudson 2007: 537)。さらに、部分的に定性  
 と非定性の区別があると Stinson (1976) は指摘する。

数としては単数と複数の 2 つが認められる。また、性は男性  
 と女性である (一部の人称代名詞と動詞の活用などにおいて男  
 性形と女性形だけでなく、丁寧形もある)。Plazikowsky-Bauer  
 (1960) は、現在・未来分詞において中性も認めている。格の数は  
 研究者によって大きく異なる。ちなみに、数、性、格、定性

の要素は名詞語幹の後に付加される。

### 3.2.1.1 数

#### 3.2.1.1.1 単数

Plazikowsky-Bauer (1960: 43), Hudson (1976: 251, 2007: 537) によれば、ハディーヤ語には単位数が認められるという。Hudson (2007: 537) を見ると、通常の「猫」が *aduuna* であるのに対し、「一匹の猫」という時、*adunčo* という形が選択されるという。*-čo* が単数形の標識であるようだが、Stinson (1976: 151) は単数の *-icco* もしくは *-cco* が定性という性質を帯びると指摘する。即ち、単数形には常になのかは不明であるが、「その1つの～」という意味合いがあるようである。

#### 3.2.1.1.2 複数

Hudson (1976: 252) によれば、ハディーヤ語の複数形の形成法は多様であるというが、最も代表的なものは語幹の後ろに *-uwwa* あるいは *-ewwa* を付加するというものである (1, 2)。次に頻度の高いものとして、語幹の後ろに *-a* を付加するというものである (3, 4)。それ以外に補完があることを Hudson (1976: 252) は指摘している (7)。(5) のように語幹末の子音を変えるものもあれば、(6) のように語末を *-e?e* とするものもある。

- (1) *kinn-ewwa* (pl.) (H: 252) 「石」 (← *kina* sg.)
- (2) *aay-uwwa* (pl.) (H: 252) 「姉妹」 (← *aaya* sg.)
- (3) *koyy-a* (pl.) (H: 252) 「客」 (← *koyyinco* sg.)
- (4) *hamašš-a* (pl.) (H: 252) 「蛇」 (← *hamaššicco* sg.)
- (5) *farado* (pl.) (H: 252) 「馬」 (← *faraššo* sg.)
- (6) *daan-e?e* (pl.) (H: 252) 「象」 (← *daanecco* sg.)
- (7) *ooso* (pl.) (H: 252) 「少年」 (← *beeto* sg.)

Plazikowsky-Bauer (1960: 43-44) においても以下のように様々な複数形の形成法が挙げられている。

- (8) *abbay-úwa* (pl.) (PB: 43) 「兄弟」 (← *abbáyo* sg.)
- (9) *buṭṭ-úwa* (pl.) (PB: 43) 「腕」 (← *búṭičo* sg.)
- (10) *lánd-a* (pl.) (PB: 43) 「少女」 (← *landičóti* sg.)

- (11) *állābó'-o* (pl.) (PB: 43) 「強盗」 (←*állābo* sg.)  
 (12) *gudd-é'e* (pl.) (PB: 43) 「結び目」 (←*gúddē* sg.)  
 (13) *ôso* (pl.) (PB: 43) 「子供」 (←*bêto* sg.)  
 (14) *lâra* (pl.) (PB: 43) 「雌牛」 (←*sâya* sg.)  
 (15) *wó'la* (pl.) (PB: 43) 「子牛」 (←*waṭânčo* sg.)

Stinson (1976: 150) によれば、*-uwwa* には定性の意味もあるという。*wiššuwwa* 「その犬ら」は Stinson (1976: 150) が示した定性複数の例であるが、*me:nt* 「その女性達」のように *-uwwa* が用いられなくても、定性複数が表される場合もある。表 3 に定性と非定性の事例を示す。

表 3: Stinson (1976: 150) の複数形の形成法

意味	単数	非定性複数	定性複数
「犬」	<i>wiššicco</i>	<i>wišša</i>	<i>wiššuwwa</i>
「女性」	<i>mentico</i>	<i>mento</i>	<i>me:nt</i>

Hudson (2007: 537) は「猫」*aduuna* の *-a* が何であるのかを述べていないが、これは Stinson (1976: 150) の *wišša* (pl.) の *-a* のように、非定性複数であるのかもしれない。定性と非定性については Stinson (1976) しか言及しておらず、本当に認められるかどうか不明である。

### 3.2.1.2 性

Stinson (1976: 150) によれば、名詞は女性的な性質を持つものを除いて、性を持たないという。

しかし Hudson (1976: 251) によれば、いくつかの名詞で女性標識 (*-ta*) が見られるという。例として、*ugguta* 「脱脂乳」、*menta* 「女性」が挙げられている。ハディーヤ語は人称代名詞の所で述べるように、3 人称において男性と女性の区別がある。*menta* 「女性」は 3 人称女性の人称代名詞と置換が可能であろうが、*ugguta* 「脱脂乳」も 3 人称女性の人称代名詞と置換されるかどうかを調査する必要がある。

### 3.2.1.3 格

ハディーヤ語の格がかなり複雑であることは、Hudson (1976: 253) において指摘されている。それは周りの環境に左右される文中では、名詞の語末の母音が脱落してしまい、その形式が不明瞭になってしまうからであるという (Hudson 1976: 253)。先行研究の格の部分を読んでも、それが単語を単独で発話した時のものなのか、文中の時の単語なのか分らないものが多い。それが影響しているのか定かではないが、研究者によって格の数が異なる。例えば、名詞の後に付加される *-n* に対して、Hudson (1976) は与格と呼んだり、場所格と呼んだりする。それに対し、Plazikowsky-Bauer (1960) は「不安定な格」と呼んで Hudson (1976) が分けているものを 1 つにまとめている。ちなみに、Stinson (1976) は主格、対格、前置詞格<sup>5</sup>という 3 つの格だけでなく、後置詞も想定している (英語で ‘on’, ‘by’, ‘for’ と訳されるものが後置詞に含まれる)。後置詞と格とでどのような違いがあるのか不明である。

#### 3.2.1.3.1 対格

ここでは、Hudson (1976), Stinson (1976) が対格と呼ぶもの、Plazikowsky-Bauer (1960) が目的格と呼ぶものを対象とする。

Hudson (1976: 253) は目的格が名詞の絶対形であり、引用形であると指摘する。また、Stinson (1976: 150) も対格が引用形であると指摘する。対格の標識の種類は様々で、Hudson (1976: 253) は *-o* が対格の標識であると述べ、Stinson (1976: 150) は *-o* だけでなく、*-a* と *-e* も対格の標識であると指摘する。*-o* で終わるものを O 名詞、*-a* で終わるものを A 名詞、*-e* で終わるものを E 名詞と呼んで、名詞を分類すればよいのかもしれない。

(16) *menc-o* (S: 150) 「男を」

(17) *menn-a* (S: 150) 「男達を」

(18) *márab-o* (PB: 45) 「蜂蜜を」 (辞書では *máрабо*)

(19) *woyâk-a* (PB: 45) 「衣服を」 (辞書では *woyâko*)

<sup>5</sup> 英語の前置詞的な意味を担うことから、前置詞格という用語がつけられているが前置詞格は形式的に語幹の後ろに *-i* がつけられる。前置詞格には「～から」や「～よ!」など多様な意味があるという (Stinson 1976: 150)。



### 3.2.1.3.2 叙述格

Plazikowsky-Bauer (1960) だけが叙述格を設定をしている。Plazikowsky-Bauer (1960) は叙述格が絶対格でもあると指摘しているが、説明も少なく、具体的な事例がないため、詳細は不明である。

### 3.2.1.3.3 主格

ここでは、Hudson (1976), Stinson (1976) が主格と呼ぶもの、Plazikowsky-Bauer (1960) が主語格と呼ぶものを対象とする。

Hudson (1976: 253) は -i のある形、-i が削除された形が主語格であると指摘する。Plazikowsky-Bauer (1960: 44) も同様のことを述べている。

(20) maac'ob-i usucc(-i) (H: 150) 「Maac'ebo と Usucci が」

(21) adíl(-i) (PB: 44) 「王が」(辞書では adílo)

### 3.2.1.3.4 属格

次に、Hudson (1976), Plazikowsky-Bauer (1960) が属格と呼ぶもの、Stinson (1976) が所有格と呼ぶもの、Korhonen et al. (1986b) が 'of' と訳すものを対象とする。

Hudson (1976: 253), Plazikowsky-Bauer (1960: 44-45) によれば、語末の母音を削除した形、あるいは語幹に声門破裂音を挿入した形が属格の形(接中辞と言えるだろう)であると説明する。また、Plazikowsky-Bauer (1960: 45) はこの他 -i も属格の標識であるという。そして、Korhonen et al. (1986b: 119) は -ii, -ika が属格の標識であるという。Stinson (1976: 150) は声門破裂音が語幹に挿入された形が属格の形であると説明する。なお、Plazikowsky-Bauer (1960: 44-45) も、もう1つの属格として語幹に声門破裂音を挿入するものを挙げているが、その際語幹末の r は 1 になるという。

(22) miʔn (H: 254) 「家の」(辞書では mine)

(23) le:ʔm (S: 150) 「Leimo の」

(24) wallâm (PB: 44) 「Wallâmo の」(辞書では wallâmo)

(25) bī'l (PB: 45) 「平地の」(辞書では bīra)

(26) mann-(i) (PB: 45) 「男達の」(辞書では máнна)

(27) mann-ii (K: 119) 「男達の」

(28) mann-ika (K: 119) 「男達の」

### 3.2.1.3.5 奪格

Hudson (1976) が奪格と呼ぶもの、Plazikowsky-Bauer (1960) と Korhonen et al. (1986b) が ‘from’ と訳すものを対象とする。

Hudson (1976: 253) は奪格の標識として -ns を挙げ、Korhonen et al. (1986b: 119) は -ii(ns) を挙げ、Plazikowsky-Bauer (1960: 46) は -īns, -īns -i を挙げている。

(29) erēr-īns (PB: 46) 「Erēr から」

(30) k̄ellūll-īns (PB: 46) 「離れた土地から」

(31) diričč-i (PB: 46) 「眠りから」(辞書では diričča)

(32) meer-ii(ns) (K: 119) 「市場から」

### 3.2.1.3.6 与格

本節では Hudson (1976) が与格と呼ぶもの、Plazikowsky-Bauer (1960) が ‘zu’ と訳すもの、Stinson が ‘for’ と訳すもの、Korhonen et al. (1986b) が ‘to’ と訳すものを対象とする。

Hudson (1976: 253) は与格の標識として -n を挙げ、Korhonen et al. (1986b: 119) と Stinson (1976: 153) は -ina を挙げ (Stinson 自身は後置詞と考えている)、Plazikowsky-Bauer (1960: 46) は -in (不安定な格)、-ik を挙げている。

(33) tiirkasi-n (H: 253) 「Tiirkaso に」

(34) be:t-ina (S: 153) 「その子供に」

(35) faraš-in (PB: 45) 「馬に」(辞書では fárašo)

(36) adil-ik (PB: 46) 「王に」(辞書では ūlla)

(37) koyy-ina (K: 119) 「客に」

### 3.2.1.3.7 場所格

ここでは、Hudson (1976) が場所格と呼ぶもの、Plazikowsky-Bauer (1960) が ‘in’ と訳すもの、Korhonen et al. (1986b) が ‘in’ と訳すものを対象とする。

Hudson (1976: 253) は場所格の標識が -n であると説明し、

Korhonen et al. (1986b: 119) は *-enne* がそれであると指摘する。Plazikowsky-Bauer (1960: 46) は *-n* (不安定な格) あるいは、語末の母音が削除された形がそうであると説明する。

(38) *ùlla-n* (PB: 45) 「土地で」 (辞書では *ùlla*)

(39) *ùll* (PB: 46) 「土地で」 (辞書では *ùlla*)

(40) *min-enne* (K: 119) 「家で」

### 3.2.1.3.8 その他の格

その他、「～を用いて (Hudson 1976: 253 の *-n*)」、「～のせいで (Plazikowsky-Bauer 1960: 45 の *-n*, 不安定な格)」(以下の 41)、「～のように (Plazikowsky-Bauer 1960: 74 の *-isa*)」(以下の 42)、「～の上で (Korhonen et al. 1986b: 119 の *-nne*)」(以下の 43) といった格が想定されている。

(41) *urbât-in* (PB: 45) 「食事が原因で」

(42) *hõbb-isa* (PB: 74) 「ライオンのように」

(43) *meentioo-nne* (K: 119) 「女性の上に」

## 3.2.2 指示詞

先行研究は近称と遠称の 2 つを設けている。先行研究によって、指示詞のパラダイムが大きく異なるため、ここではそれぞれの研究ごとに節を立てる。

### 3.2.2.1 Plazikowsky-Bauer (1960) の事例

Plazikowsky-Bauer (1960) は指示代名詞に関して、1つ1つの形式を示していないため、いつ使われるのかよく分からない。中でも形容詞形と名詞形の違いが何であるのかよく分からない。名詞形の例を1つも示しない所に問題がある。

表 4: 近称・形容詞形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 48)

Adjektiv	男性形	女性形
主語 (sg.)	ku, ka	tu, ta
主語 (pl.)	ku, káni	tu, táni
目的語 (sg.)	ka, kak	ta, tat
目的語 (pl.)	kánu, kak	tánu, tat
属格 (sg.)	ka	ta
属格 (pl.)	—	—
不安定な格 (sg.)	kan, káni	tan, tani
不安定な格 (pl.)	kán, kánu	tan, tánu
強調	kánni, kánnu	tánni, tánnu

表 5: 近称・名詞形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 48)

Substantiv	男性形	女性形
単数	kukó	tutó
複数	kukó	

表 6: 遠称・形容詞形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 48)

Adjektiv	男性形	女性形
主語・目的語・属格 (sg.)	ō, ōk, ōkka	ōt, ōta
主語・目的語・属格 (pl.)	ōman	
不安定な格 (sg.)	ōken	ōten
不安定な格 (pl.)	ōman	

表 7: 遠称・名詞形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 49)

Substantiv	男性形	女性形
主語・目的語・属格 (sg.)	ōkkó'o	ōttó'o
主語・目的語・属格 (pl.)	ōkkó'o	

### 3.2.2.2 Stinson (1976) の事例

Plazikowsky-Bauer (1960) の名詞は Stinson (1976) の代名詞に相当するかもしれないが、詳細は不明である。

表 8: 近称・形容詞 (Stinson 1976: 151)

Adjective	男性形	女性形
主格 (=主語)	ku	tu
対格 (=目的語)	ka	ta

表 9: 近称・代名詞 (Stinson 1976: 151)

Pronoun	男性形	女性形
主格 (=主語)	kuk	tut
対格 (=目的語)	kak	tat

表 10: 遠称・形容詞 (Stinson 1976: 151)

Adjective	男性形	女性形
主格 (=主語)	e:	e:
対格 (=目的語)	o:	o:

表 11: 遠称・代名詞 (Stinson 1976: 151)

Pronoun	男性形	女性形
主格 (=主語)	e:k	e:t
対格 (=目的語)	o:	o:

### 3.2.2.3 Hudson (1976) の事例

Plazikowsky-Bauer (1960), Stinson (1976) では区別されていた形容詞形と名詞形 (Stinson では代名詞) の区別は Hudson (1976) において見られない。

表 12: 近称 (Hudson 1976: 255-256)

Demonstrative	男性形	女性形
主格 (=主語) (sg.)	ku(k)	tu(t)
主格 (=主語) (pl.)	ku(k)	ku(k)
対格 (=目的語) (sg.)	ka	ta
対格 (=目的語) (pl.)	ka	ka

表 13: 遠称 (Hudson 1976: 255-256)

Demonstrative	男性形	女性形
主格 (=主語) (sg.)	o(k)	o(t)
主格 (=主語) (pl.)	o(k)	o(k)
対格 (=目的語) (sg.)	oo	ee
対格 (=目的語) (pl.)	ee	ee

### 3.2.3 人称代名詞

格に応じて人称代名詞の形が異なる。属格の人称代名詞が接辞であるとすれば、ハディーヤ語の接辞には珍しく、接頭辞である。人称代名詞には主格形、対格形など色々とある。

### 3.2.3.1 主格人称代名詞

Plazikowsky-Bauer (1960: 47) は単数の2人称と3人称において男性と女性の区別があると考えている。Hudson (1976: 256) は3人称の単数において、男性形と女性形だけでなく、丁寧形も存在すると指摘している。

表 14: Hudson (1976: 256) のパラダイム

Nominative	単数形	複数形
1人称	ani	neese
2人称	ati	ki?ne
3人称 (m.)	itt'o	itt'u or issu
3人称 (f.)	isi	
3人称 (pol.)	isse	

表 15: Plazikowsky-Bauer (1960: 47) のパラダイム

Subjekt	単数形	複数形
1人称	an, ani	nēs
2人称 (m.)	at, ati	ki'n
2人称 (f.)	tāna	iss, issi
3人称 (m.)	it, iti	
3人称 (f.)	is, isi	

Hudson (1976: 256) は3人称複数において、itt'uあるいは issu が使われるとされるが、itt'uが「彼らが」に対応し、issuが「彼女らが」に対応しないのかという問題がある。

### 3.2.3.2 対格人称代名詞

Plazikowsky-Bauer (1960: 47) によれば、3人称単数のみで男性と女性の区別があるという。一方、Korhonen et al. (1986b: 118) は3人称の単数において、男性形と女性形だけでなく、丁寧形も存在すると指摘している。

表 16: Hudson (1976: 257) のパラダイム

Accusative	単数形	複数形
1 人称	e(e)s	ne(e)s
2 人称	ke(e)s	ki?n
3 人称 (m.)	itt'i	itt'u or iss
3 人称 (f.)	isi	

表 17: Plazikowsky-Bauer (1960: 47) のパラダイム

Objekt	単数形	複数形
1 人称	īn, īne, īni, ēs	nēsē
2 人称	kēs	ki'nem
3 人称 (m.)	īt	iss
3 人称 (f.)	īs	

表 18: Korhonen et al. (1986b: 118) のパラダイム

Object	単数形	複数形
1 人称	eese	neese
2 人称	keese	ki'nuwwa
3 人称 (m.)	itt'o	issuwwa, itt'uwwa
3 人称 (f.)	ise	
3 人称 (pol.)	isse	

### 3.2.3.3 与格人称代名詞

表 19: Hudson (1976: 258) のパラダイム

Dative	単数形	複数形
1 人称	iin	niin
2 人称	kiin	ki?nin
3 人称 (m.)	itt'in	itt'uwwin or issuwin
3 人称 (f.)	isin	
3 人称 (pol.)	issen	

表 20: Plazikowsky-Bauer (1960: 47) のパラダイム

Dativ	単数形	複数形
1 人称	īn, īna, ēs	nīn, nīna
2 人称	kēs	ki'nem
3 人称 (m.)	īt, ītēn, īttēn	issēn
3 人称 (f.)	īs, īsēn	

### 3.2.3.4 奪格人称代名詞と場所格人称代名詞

表 21: Plazikowsky-Bauer (1960: 47) のパラダイム

Ablative, Lokative	単数形	複数形
1 人称	innē, inni	ninni, ninnē
2 人称	kinnē, kinni	kinni, kinnē
3 人称 (m.)	itēn	issēn
3 人称 (f.)	isēn	

### 3.2.3.5 属格人称代名詞

直接的な言及はないが、Plazikowsky-Bauer (1960) は接辞ではなく、語と考えているようである。また、Korhonen et al. (1986b: 116) は 1 人称単数以外を語と考えているようである。

表 22: Hudson (1976: 258-259) のパラダイム

Genitive	単数形	複数形
1 人称	i-	ni-
2 人称	ki-	kiʔn-
3 人称 (m.)	it(t)ʔ-	ittʔu- or issu-
3 人称 (f.)	is-	
3 人称 (pol.)	iss-	

表 23: Plazikowsky-Bauer (1960: 48) のパラダイム

Adjektiv	単数形	複数形
1 人称	ī, īy, yī	nī
2 人称	ki, kī, kīk	kiʔn
3 人称 (m.)	it	iss
3 人称 (f.)	is	

表 24: Korhonen et al. (1986b: 116) のパラダイム

Possesive	単数形	複数形
1 人称	imine	ni mine
2 人称	ki mine	kiʔn mine
3 人称 (m.)	itʔ laro	issuwwi mine, ittʔuwu mine
3 人称 (f.)	is lokko	
3 人称 (pol.)	iss mine	

※3.sg.m.の名詞は「雌牛」、3.sg.f.の名詞は「脚」である。それ以外は「家」である。



### 3.2.4 動詞、コピュラ、動詞の派生

Crass (2005: 961) によれば、ハディーヤ語の動詞は接尾辞によって、屈折するという。また、動詞の形態素の順番は、「語基+人称標識+テンス/アスペクト標識+最終接尾辞」であるという。Crass (2005: 961) を読んだだけでは、最終接尾辞が何であるのかよく分からないが、先行研究を読むと否定の標識や疑問の標識などが来る。また、ハディーヤ語では 3 人称の単数において男性と女性のみが区別されるという意見があれば (Stinson 1976, Plazikowsky-Bauer 1960)、Hudson (1976) と Korhonen et al. (1986b) のように丁寧形も認めるという意見もある。

Plazikowsky-Bauer (1960) と Korhonen et al. (1986b) は、形態素を抜き出した形を示すだけでなく、实例を示していて、分かりやすい。Plazikowsky-Bauer (1960) はさらに規則的な動詞の活用だけでなく、一部の不規則な動詞も紹介している。

先行研究で挙げられている動詞のパラダイムを確認していくが、その前に先行研究がどのような TMA の範疇 (肯定形) を取り上げているのかを表 25 にまとめておく。

表 25: 先行研究による動詞・肯定形の TMA の範疇

	H	S	PB	K
1	単純過去形	過去形	過去 II 形	単純完了形
2		完了形		
3			過去完了形	
4			非現実形	
5				過去継続形
6	現在完了形		過去 I 形	現在完了形
7	未完了形	現在・未来形	現在・未来形	未完了形
8			継続形	
9			近未来形	
10			複合過去形	
11	接続形			
12	命令形		命令形	命令形
13	指令形		指令形	指令形
14		動名詞形	過去動名詞形	動名詞形
15			現在動名詞形	
16			未来動名詞形	
17			過去分詞形	
18			現在・未来分詞形	
19			希求形	

Plazikowsky-Bauer (1960: 66) は希求形 (表 25 の 19) を想定しているが、パラダイムを挙げていない。これは不変化詞 ta'ni をつけるというものであるが、何に対して ta'ni をつければよいか

不明である。

### 3.2.4.1 単純過去形 (H)／過去形 (S)／過去 II 形 (PB)／単純完了形 (K)

表 26: 単純過去形 (Hudson 1976: 263-264)

Simple Perfect	単数形	複数形
1 人称	-ummo	-numo
2 人称	-titto	-takkoʔo
3 人称 (m.)	-ukko	-toʔo
3 人称 (f.)	-toʔo	
3 人称 (pol.)	-aakkoʔo	

表 27: 「存在する」の過去形 (Stinson 1976: 152)

Past	単数形	複数形
1 人称	heʔ-ummo	heʔ-nummo
2 人称	heʔ-itto	heʔ-akkoʔo
3 人称 (m.)	heʔ-ukko	heʔ-akkaʔo
3 人称 (f.)	heʔ-itto	

表 28: 「離す」の過去 II 形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 66)

Praeteritum II	単数形	複数形
1 人称	banûmo	bannûmo
2 人称	bantítto	bantáko
3 人称 (m.)	banáko	banáko
3 人称 (f.)	bantó	

表 29: 「言う」の過去 II 形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 60)

Praeteritum II	単数形	複数形
1 人称	yûmo	yinûmo
2 人称	yitítto	yitáko
3 人称 (m.)	yûko	yáko
3 人称 (f.)	yitó	

表 30: 「手に取る」の単純完了形 (Korhonen et al. 1986b: 110)

Simple Perfect	単数形	複数形
1 人称	massummo	massimummo
2 人称	massitto	massitakko'o
3 人称 (m.)	massukko	massamukko
3 人称 (f.)	massito'o	
3 人称 (pol.)	massakko'o	

### 3.2.4.2 完了形 (S)

表 31: 「手に取る」の完了形 (Stinson 1976: 152)

Perfect	単数形	複数形
1 人称	mass-a: he?ummo	mass-inummo he?inummo
2 人称	mass-ita: he?litto	mass-itakkamo he?lakko?o
3 人称 (m.)	mass-a: he?ukko	mass-akkamo he?akka?o
3 人称 (f.)	mass-itta?a he?lo?o	

### 3.2.4.3 過去完了形 (PB)

表 32: 「離す」の過去完了・非省略形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 65)

Plusquamperfektum	単数形	複数形
1 人称	banâ etě ihē'ûmo	bannâ etě ihē'nûmo
2 人称	bantâmâ etě ihē'litto	bantakâ etě ihē'lâko
3 人称 (m.)	banâ etě ihē'ûko	banakâ etě ihē'âko
3 人称 (f.)	bantâ etě ihē'lo'o	

表 33: 「離す」の過去完了・省略形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 65)

Plusquamperfektum	単数形	複数形
1 人称	banātē'ûmo	bannātē'nûmo
2 人称	bantātēlitto	bantakātēlako
3 人称 (m.)	banātē'ûko	banakātē'âko
3 人称 (f.)	bantātēlô'o	

### 3.2.4.4 非現実形 (PB)

表 34: 「離す」の非現実・非省略形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 65)

Irrealis	単数形	複数形
1 人称	banâm ihē'ûmo	bannâm ihē'nûmo
2 人称	bantât ihē'lítto	bantakôk ihē'láko
3 人称 (m.)	banâk ihē'ûko	banakôk ihē'áko
3 人称 (f.)	bantâm ihē'lo'o	

表 35: 「離す」の非現実・省略形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 65)

Irrealis	単数形	複数形
1 人称	banāmē'ûmo	bannāmē'nûmo
2 人称	bantâtêlítto	bantakôkêláko
3 人称 (m.)	banākē'ûko	banakôkē'áko
3 人称 (f.)	bantamêló'o	

### 3.2.4.5 過去継続形 (K)

表 36: 「手に取る」の過去継続形 (Korhonen et al. 1986b: 113)

Past Continuous	単数形	複数形
1 人称	massam he'ummo	massinam he'nummo
2 人称	massitam he'lítto	massitakkam he'lakko'o
3 人称 (m.)	massam he'ukko	massamam he'amukko
3 人称 (f.)	massitam he'lo'lo	
3 人称 (pol.)	massakkam he'akko'o	

### 3.2.4.6 現在完了形 (H, K) / 過去 I 形 (PB)

表 37: 現在完了形 (Hudson 1976: 264-265)

Present Perfct	単数形	複数形
1 人称	-ammo	-naammo
2 人称	-taatto	-takka?okko
3 人称 (m.)	-aako	-ta?okko
3 人称 (f.)	-ta?okko	
3 人称 (pol.)	-akka?okko	

表 38: 「離す」の過去 I 形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 64)

Praeterium I	単数形	複数形
1 人称	banâmo	bannâmo
2 人称	bantâtto	bantako'ôko
3 人称 (m.)	banâko	banako'ôko
3 人称 (f.)	banta'ôko	

表 39: 「手に取る」の現在完了形 (Korhonen et al. 1986b: 110)

Present Perfect	単数形	複数形
1 人称	massaammo	massinaammo
2 人称	massitaatto	massitakko'okko
3 人称 (m.)	massaakko	massakko, massamaakko, massito'okko
3 人称 (f.)	massito'okko	
3 人称 (pol.)	massakko'okko	

### 3.2.4.7 未完了形 (H, K) / 現在・未来形 (S, PB)

表 40: 未完了形 (Hudson 1976: 265)

Imperfect	単数形	複数形
1 人称	-oommo	-noomo
2 人称	-tootto	-takkamo
3 人称 (m.)	-ookko	-tamo
3 人称 (f.)	-tamo	
3 人称 (pol.)	-aakkamo	

表 41: 「手にする」の現在・未来形 (Stinson 1976: 152)

Present / Future	単数形	複数形
1 人称	mass-ommo	mass-inommo
2 人称	mass-ittotto	mass-itakkamo
3 人称 (m.)	mass-okko	mass-akkamo
3 人称 (f.)	mass-itammo	

表 42: 「離す」の現在・未来形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 64)

Praesentium / Futurum	単数形	複数形
1 人称	banômo	bannômo
2 人称	bantôtto	bantakâmo
3 人称 (m.)	banôko	banakâmo
3 人称 (f.)	bantâmo	

表 43: 「手に取る」 未完了形 (Korhonen et al. 1986b: 110)

Imperfect	単数形	複数形
1 人称	massoommo	massinoommo
2 人称	massitootto	massitakkamo
3 人称 (m.)	massookko	massitamo, massamooko, massookko
3 人称 (f.)	massitamo	
3 人称 (pol.)	massakkamo	

### 3.2.4.8 継続形 (PB)

表 44: 「離す」 の継続形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 64)

Durativum	単数形	複数形
1 人称	banōmúla	bannōmúla
2 人称	bantōlla	bantakamúla
3 人称 (m.)	banōla	banakamúla
3 人称 (f.)	bantamúla	

表 45: 「言う」 の継続形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 64)

Durativum	単数形	複数形
1 人称	yōmo	yinōmúla
2 人称	yitōlla	yitakamúla
3 人称 (m.)	yōlla	yakamúla
3 人称 (f.)	yitāmúla	

Plazikowsky-Bauer (1960: 60) は「言う」の継続のパラダイムを示しているが、1 人称単数形は yōmo のように -la が付加されていない。「言う」が不規則な動詞であるから、-la が付かないのか、単なる間違いであるのか不明である。

### 3.2.4.9 近未来形 (PB)

表 46: 「離す」 の近未来 ihōmúla 形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 65)

Nahes Futurum	単数形	複数形
1 人称	banēn(a) ihōmúla	bannēn(a) inkōmúla
2 人称	bantēn(a) ikkōlla	bantakēn(a) ikkakamúla
3 人称 (m.)	banēn(a) ihōla	banakēn(a) ihakamúla
3 人称 (f.)	bantēn(a) ikkāmúla	

表 47: 「離す」の近未来 eti 形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 65)

Nahes Futurum	単数形	複数形
1 人称	banên(a) eti	bannên(a) eti
2 人称	bantén(a) eti	bantakên(a) eti
3 人称 (m.)	banên(a) eti	banakên(a) eti
3 人称 (f.)	bantên(a) eti	

近未来形の後ろに来ている eti はコピュラである。

### 3.2.4.10 複合過去形 (PB)

表 48: 「離す」の複合過去形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 64)

Praeteritum Compositi	単数形	複数形
1 人称	banâmā eti	bannâmā eti
2 人称	bantâmā eti	bantakâmā eti
3 人称 (m.)	banâmā eti	banakâmā eti
3 人称 (f.)	bantâmā eti	

Plazikowsky-Bauer (1960: 62) は marâ-mā eti という事例も示しているが、これはアムハラ語の heḡē nau 「私が行ったということですよ」に対応するという。heḡē は副動詞の 1.sg. の形で、nau は 3.sg. のコピュラである。

### 3.2.4.11 接続形 (H)

表 49: 接続形<sup>6</sup> (Hudson 1976: 269)

Conjunctive	単数形	複数形
1 人称	-aa	-naa
2 人称	-ta	-takkaʔa
3 人称 (m.)	-aa	-taʔa
3 人称 (f.)	-taʔa	
3 人称 (pol.)	-akkaʔa	

Hudson (1976) は実例を示していないため、この形式がいつ使われるのかよく分からない。

<sup>6</sup> Hudson (2007: 543) において、接続形は副動詞と呼ばれているが、そこにおいても具体例は示されていない。

### 3.2.4.12 命令形 (H, PB, K)

表 50: 命令形 (Hudson 1976: 267)

Imperative	単数形	複数形
2 人称	-e or -i	-ehe

表 51: 「離す」の命令形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 66)

Imperativ	単数形	複数形
2 人称 肯定 男性	bané	bantéhe
2 人称 肯定 女性	banté	

表 52: 「手に取る」の命令形 (Korhonen et al. 1986b: 109)

Imperative	単数形	複数形
2 人称 肯定	massee	masseehe

### 3.2.4.13 指令形 (H, PB, K)

表 53: 指令形 (Hudson 1976: 268)

Jussive	単数形	複数形
1 人称	-ona	-nona
3 人称 (m.)	-ona	-tona
3 人称 (f.)	-tona	
3 人称 (pol.)	-akkona	

表 54: 「離す」の指令形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 64)

Jussiv	単数形	複数形
1 人称	banôna	bannôna
2 人称	bantôna	bantakôna
3 人称 (m.)	banôna	banakôna
3 人称 (f.)	bantôna	

表 55: 「手に取る」の指令形 (Korhonen et al. 1986b: 109)

Jussive	単数形	複数形
1 人称	massona	massinona
3 人称 (m.)	massona	massamona, massitona
3 人称 (f.)	massitona	
3 人称 (pol.)	massakkona	

指令形の活用に関して、Hudson (1976) と Korhonen et al.



(1986b) は 2 人称を認めていないが、Plazikowsky-Bauer (1960) は認めている。2 人称の指令形が本当に認められるのかどうかを調査する必要がある。

### 3.2.4.14 動名詞形 (S, K) / 過去動名詞形 (PB)

Stinson (1976: 154) は動名詞形が従属節の動詞として使われると指摘する。

表 56: 「手に取る」の動名詞形 (Stinson 1976: 152)

Gerundium	単数形	複数形
1 人称	mass-a:	mass-ina:
2 人称	mass-ita	mass-itakka?a
3 人称 (m.)	mass-a:	massakka?a:
3 人称 (f.)	mass-itta?a	

表 57: 「離す」の過去動名詞形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 59)

Gerundium Praeteriti	単数形	複数形
1 人称	banâ	bannâ
2 人称 (m.)	bantâ	bantakâ, bantaka'a
2 人称 (f.)	bantâtâ	
3 人称 (m.)	banâ	banakâ, banaka'á
3 人称 (f.)	bantâ	

表 58: 「手に取る」の動名詞形 (Korhonen et al. 1986b: 114)

Gerund	単数形	複数形
1 人称	massaa	massinaa
2 人称	massitaa	massitakka'a
3 人称 (m.)	massaa	massamaa
3 人称 (f.)	massita'a	
3 人称 (pol.)	massakka'a	

### 3.2.4.15 現在動名詞形 (PB)

表 59: 「離す」の現在動名詞形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 59)

Gerundium Praesenti	単数形	複数形
1 人称	banô	bannô
2 人称	bantô	bantakô, bantako'ó
3 人称 (m.)	banô	banakô, banako'ó
3 人称 (f.)	bantô, bantá	

### 3.2.4.16 未来動名詞形 (PB)

表 60: 「離す」の未来動名詞形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 65)

Gerundium Futuri	単数形	複数形
1 人称	banê	bannê
2 人称	bantê	bantakê
3 人称 (m.)	banê	banakê
3 人称 (f.)	bantê	

### 3.2.4.17 過去分詞形

表 61: 「離す」の過去分詞形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 59)

Partizipium Praeteriti	単数形	複数形
男性	banākoháni	banto'ōkēno
女性	bantōkotáni	

### 3.2.4.18 現在・未来分詞形

表 62: 「離す」の現在・未来分詞形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 64)

Partizipium Praesenti Futuri	単数形	複数形
男性	banōhháni	banāno
女性	bantamotani	bantakmkēno
中性	banōllúwa	

単数の性に関して、男性と女性の区別だけでなく中性も区別されている。中性を認めることが妥当なのかを検証する必要がある。

### 3.2.4.19 動詞の否定

否定の標識には色々な形があるが、基本的には -yyo が使われる (Hudson 1976: 266, Stinson 1976: 154)。-yyo は TMA 標識の後ろに置かれる。命令法・指命令法の否定形では、-yyo 以外のものが用いられる (Plazikowsky-Bauer 1960: 67, Korhonen et al. 1986b: 109)。また、Plazikowsky-Bauer (1960: 67) を見ると、動名詞の否定のパラダイムにおいても -yyo は現れない。これらの具体的な形式については、3.2.4.19.7-9 で確認するが、もう 1 つの



3.2.4.19.1 否定過去 II 形 (PB) / 否定単純完了形=否定現在完了形 (K)

表 64: 「離す」の否定過去 II 形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 66)

Praeteritum II	単数形	複数形
1 人称	banûmóyo	bannūmóyo
2 人称	bantittóyo	bantakóyo
3 人称 (m.)	banūkóyo	banakóyo
3 人称 (f.)	bantóyo	

表 65: 「手に取る」の否定単純完了形=否定現在完了形  
(Korhonen et al. 1986b: 110)

Simple Perfect, Present Perfect	単数形	複数形
1 人称	massummoyyo	massinumoyyo
2 人称	massittoyyo	massitakko'oyyo
3 人称 (m.)	massukkoyyo	massukkoyyo, massamukkoyyo, massito'oyyo
3 人称 (f.)	massito'oyyo	
3 人称 (pol.)	massakko'oyyo	

Korhonen et al. (1986b: 110) は、否定形の場合、単純完了と現在完了が同じになると述べているが、それが妥当なのかを検証する必要がある。

3.2.4.19.2 否定過去完了形 (PB)

表 66: 「離す」の否定過去完了形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 66-67)

Plusquamperfektum	単数形	複数形
1 人称	banâ eti-hē'umóyo	bannâ eti-hē'nūmóyo
2 人称	bantâ eti-hē'littóyo	bantakâ eti-hē'lakóyo
3 人称 (m.)	banâ eti-hē'ūkóyo	banakâ eti-hē'akóyo
3 人称 (f.)	bantâ eti-hē'lo'óyo	

### 3.2.4.19.3 否定非現実形 (PB)

表 67: 「離す」の否定非現実形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 66-67)

negative Irrealis	単数形	複数形
1 人称	banâm ihē'ūmóyo	bannâm ihē'nūmóyo
2 人称	bantâtt ihē'littóyo	bantakôk ihē'lakóyo
3 人称 (m.)	banâk ihē'ūkóyo	banakôk ihē'akóyo
3 人称 (f.)	bantâm ihē'lo'óyo	

### 3.2.4.19.4 否定過去継続形 (K)

表 68: 「手に取る」の否定過去継続形 (Korhonen et al. 1986b: 113)

Past Continuous	単数形	複数形
1 人称	massam he'ummoyyo	massinam he'nummoyyo
2 人称	massitam he'littoyyo	massitakkam he'lakko'oyyo
3 人称 (m.)	massam he'ukkoyyo	massamam he'amukkoyyo
3 人称 (f.)	massitam he'lo'loyyo	
3 人称 (pol.)	massakkam he'akko'oyyo	

### 3.2.4.19.5 否定過去 I 形 (K)

表 69: 「離す」の否定過去 I 形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 64)

Praeterium I	単数形	複数形
1 人称	banāmōyo	bannāmóyo
2 人称	bantâttóyo	bantakōkóyo
3 人称 男性形	banākóyo	banakōkóyo
3 人称 女性形	bantākóyo	

### 3.2.4.19.6 否定現在形 (PB) / 否定未完了形 (K)

表 70: 「離す」の否定現在形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 66)

Praesentium	単数形	複数形
1 人称	banōmóyo	bannōmóyo
2 人称	bantóyo	bantakamóyo
3 人称 (m.)	banóyo	banakamóyo
3 人称 (f.)	bantamóyo	

表 71: 「手に取る」の否定未完了形 (Korhonen et al. 1986b: 110)

Imperfect	単数形	複数形
1 人称	massoommoyyo	massinoommoyyo
2 人称	massitoyyo	massitakkamoyyo
3 人称 (m.)	massoyyo	massitamoyyo, massamoyyo, massoyyo
3 人称 (f.)	massitamoyyo	
3 人称 (pol.)	massakkamoyyo	

### 3.2.4.19.7 否定命令形 (H, PB, K)

表 72: 否定命令形 (Hudson 1976: 267)

Imperative	単数形	複数形
2 人称	-tittee	-takkotte

表 73: 「離す」の否定命令形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 66-67)

Imperativ	単数形	複数形
2 人称 (m.)	bantét	bantakóti
2 人称 (f.)	bantít	

表 74: 「手に取る」否定命令形 (Korhonen et al. 1986b: 109)

Imperative	単数形	複数形
2 人称	massitittee	massitakkotte

### 3.2.4.19.8 否定指令形 (K)

表 75: 「手に取る」の否定指令形 (Korhonen et al. 1986b: 109)

Jussive	単数形	複数形
1 人称	masseenayyo	massinoone
3 人称 (m.)	massone	massitoone, massoone
3 人称 (f.)	massitoone	
3 人称 (pol.)	massakkoone	

### 3.2.4.19.9 否定動名詞形 (K)

表 76: 「手に取る」の否定動名詞形 (Korhonen et al. 1986b: 114)

Gerund	単数形	複数形
1 人称	massoo'nim	massinoo'nim
2 人称	massitoo'nim	massitakkoo'nim
3 人称 (m.)	massoo'nim	massamoo'nim
3 人称 (f.)	massitoo'nim	
3 人称 (pol.)	massakkoo'nim	

### 3.2.4.19.10 否定現在分詞形 (PB)

表 77: 「離す」の否定現在分詞形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 67)

Partizipium Praesentis	
単数 (m.)	banô bē'áni
単数 (f.)	bantô bē'táni

### 3.2.4.19.11 否定過去希求形 (PB)

表 78: 「離す」の否定過去希求形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 67)

Optativ Praeteriti	
1 人称 (sg.)	banûm bē'arē
2 人称 (sg.)	bantîtt bē'are

Plazikowsky-Bauer (1960: 66) によれば、希求肯定形では 1 人称であろうと 2 人称であろうと、ta'ni が付加されることによって成り立つということであったが、否定形では人称活用があり、1 人称と 2 人称で形が異なる。3 人称や複数の活用については、省略されている。

### 3.2.4.19.12 否定現在希求形 (PB)

表 79: 「離す」の否定現在希求形 (Plazikowsky-Bauer 1960: 67)

Optativ Praesentis	
1 人称 (sg.)	banôm bē'arē
2 人称 (sg.)	bantôt t bē'are

否定過去希求形と同様、3人称や複数の活用は省略されている。

#### 3.2.4.20 疑問の標識

ここでは Yes/No 疑問文の疑問標識をまとめる。Hudson (1976: 267) は -n, -nnihe が疑問標識であるという。Stinson (1976: 154) は -nihe がそうであると指摘する。Plazikowsky-Bauer (1960: 76) は疑問の標識として、-u, -nē の 2つを取り上げている。否定の疑問文では、疑問標識の前に否定標識 (-yo-) が来る。なお、コピュラの疑問については、次節で取り上げる。

(46) ittitto-nnihe? (H: 267) 「あなたが食べたのですか？」

(47) mato:tto-nihe? (S: 154) 「あなたが行くののですか？」

(48) wättitt-u? (PB: 76) 「あなたが来たののですか？」

(49) wättên-nē? (PB: 76) 「あなたは来るののですか？」

(50) wärkó-yo-nē? (PB: 76) 「彼は来なかったののですか？」

#### 3.2.4.21 コピュラの標識

コピュラを表す場合、Hudson (1976: 274) によれば、主語が女性の時 -tte が必要となるが、男性の時 -tte はあってもなくてもよいという。またこのような違いは、男性と女性の区別がある 3人称単数形だけでなく、男性と女性で区別のない 1人称でも見られるという。主語が 1人称女性である時、-tte は必要となり、それがなければ、1人称は男性と女性の両方の可能性があるという。

コピュラの否定の標識は Hudson (1976: 274) によれば、-yyo であるというが、なくてもよいという。-yyo が付加される場合、順番としては -tte- の後に -yyo が来る。

コピュラの疑問は叙述の後ろに -nnihe を置く。

(51) iiyabbayyo (H: 274) 「私の兄弟です」

(52) iiyaaya-tte (H: 274) 「私の姉妹です」

(53) an k'eeraa?la (H: 274)

私 背が高い

「私 (m./f.) は背が高いです」



(54) an k'eeraa?la-tte (H: 274)  
私 背が高い-コピュラ (f.)  
「私 (f.) は背が高いです」

(55) itt'o(-tte)-yyo (H: 274) 「そちらは彼ではありません」

(56) kiinabbayyo-nnihe? (H: 274) 「あなた方の兄弟ですか？」<sup>8</sup>

### 3.2.4.22 不定形

Plazikowsky-Bauer (1960: 54, 76) によれば、不定形では -ima, -imo が動詞語幹の後に来る。Hudson (1976: 273) は -i(m) が動詞語幹の後に来るという。

(57) lell-im (H: 273) 「遊ぶ」

(58) fir-ima (PB: 54) 「出る」 (fir- 「出る」)

### 3.2.4.23 従属節の標識

「～ので」、「～なら」、「～の前に」などと訳されるものが対象であり、色々な標識がある。Stinson (1976), Plazikowsky-Bauer (1960), Korhonen et al. (1986) の動詞文を見ると、動詞の後ろに従属節の標識が来ているのが分る。

#### 3.2.4.23.1 関係節の標識

関係節の代表的な標識として、動詞の後に -k を付加するというものがある (Hudson 1976: 260, Stinson 1976: 154)。Plazikowsky-Bauer (1960: 72) は修飾される名詞が男性名詞の時 -ki が用いられ、女性名詞の時 -ti が用いられるというが、Hudson (1976: 260) の -k は男性名詞と女性名詞の両方で使用される。その他、Plazikowsky-Bauer (1960: 72) は語幹に -o を付加するものも挙げている。

(59) lellukko-k (H: 260) 「遊んだでいた～(m.)」

(60) lellito?o-k (H: 260) 「遊んだでいた～(f.)」

(61) la?ukko-k (S: 154) 「彼が知っていた～(m.)」

(62) wārāko-ki (PB: 72) 「やって来た～(m.)」

<sup>8</sup> 「あなた方の」は ki?n- ではなく、kii- となっている。

(63) inse'-o (PB: 72) 「横たわっている～(m./f.)」

#### 3.2.4.24 使役形

ハディーヤ語の使役の標識として -s(s)- がある (Plazikowsky-Bauer 1960: 55-58, Stinson 1976: 153, Hudson 1976: 271)。この他、Plazikowsky-Bauer (1960: 55-58) と Sim (1991: 49) は -a- も使役の標識であると指摘する。使役の標識は語幹の直後に現れる。

(64) fir-s- (H: 271) 「出させる=送る」(fir- 「出ていく」)

(65) moʔ-iss-ukko (S: 153) 「彼が見せた」

(66) agi-ss- (PB: 56) 「飲ませる」(ag- 「飲む」)

(67) huf-a-'ômo (PB: 56) 「私が煮る」(huf- 「煮える」)

#### 3.2.4.25 受身形

受身の標識は Hudson (1976: 271), Stinson (1976: 153), Plazikowsky-Bauer (1960: 58) によれば -am- であるという。ただし、この -am- は常に受身的意味合いを持つわけではない。(59) のように能動形が「質問する」であるのに対し、それに -am- が付加されるものが「値切る」という意味を持つということを Plazikowsky-Bauer (1960: 58) は指摘している。ちなみに、-am- は語幹の直後に来る。

(68) uww-am- (H: 271) 「与えられる」(uww- 「与える」)

(69) moʔ-am-ukko (S: 153) 「彼が見られた」

(70) unṭam- (PB: 58) 「祈られる」(unṭ- 「祈る」)

(71) ṭa'm-am- (PB: 58) 「値切る」(ṭa'm- 「質問する」)

使役の標識も語幹の直後に現れていたが、「～させられる」のように使役の受身を言う時、どちらの標識が先に来るのかという問題がある。

#### 3.2.4.26 再帰形

再帰の標識には -āk- と -ʔ- (=-'-) がある。-āk- の事例を挙げているのは Plazikowsky-Bauer (1960: 58-59) と Stinson (1976: 153) である。-ʔ- (=-'-) の事例を挙げているのは、Plazikowsky-

Bauer (1960: 58-59) と Hudson (1976: 271) である。-āk- は語幹の後ろに現れる。Hudson (1976: 272) の事例をみると、-ʔ- は (61) のように語幹の後に -aʔ- という形で表れている。しかし、Plazikowsky-Bauer (1960: 59) の事例をみると、(62) のように語幹中に -ʔ- が挿入されている。その際 -r- は -l- となっている<sup>9</sup>。

(72) iss-āk- (PB: 58) 「自身を横たえる=横になる」 (iss- 「を横たえる」)

(73) aanš-aʔ- (H: 272) 「自身を洗う」 (aanš- 「洗う」)

(74) fē'l- (PB: 59) 「集まる」 (fēr- 「集める」)

#### 3.2.4.27 強意形

Hudson (1976: 272) によれば、ハディーヤ語には強意動詞<sup>10</sup>があるという。以下の (75) を見ると、語幹末の -m- が繰り返されている。

(75) gaʔmam- (H: 272) 「繰り返しかむ」 (gaʔm- 「かむ」)

#### 3.2.4.28 指令法と命令法の強調形

Hudson (1976: 268) と Sim (1988: 82) によれば、指令法と命令法を強調する場合、-du- (語幹の後ろに付加) が使用されるという。

(76) agon-du! (H: 268) 「私／彼に飲まさせてください!」

(77) mare-du! (H: 268) 「行きなさい!」

#### 3.2.4.29 動作主形

Hudson (1976: 273-274) は、-(a)anco が動作主の標識であると指摘する。-(a)anco は語幹の後ろに来る。

(78) awwans-aanco (H: 273) 「案内人」 (awwans- 「導く」)

<sup>9</sup> 語幹末の子音が -r- の時、-l- になる。ただし、Hudson (1976: 272) の mur- 「切る」の事例は、muʔr- であり、muʔl- になっていない。

<sup>10</sup> 亀井・河野・千野 (1996: 283-284) は強意動詞=強意活用について次のように説明している。それは一般に高度の強さを表す動詞であり、アラビア語のように子音を重ねたり (qattala 「多くを殺す」←qatala 「殺す」)、日本語のように接辞を加える (ぶんなぐる←なぐる) ことによって作られる。

### 3.3 統語論

ここでは、基本語順、疑問文、不定形の文、関係節を対象とする。

#### 3.3.1 基本語順

ここでは、Plazikowsky-Bauer (1960), Stinson (1976), Hudson (1976), Korhonen et al. (1986b) の統語論をまとめる。

基本語順は SOV である (Plazikowsky-Bauer 1960: 71, Hudson 1976: 275, Stinson 1976: 154)。また「S は C である」というコピュラ文では、SC という語順になる (79)。ちなみに、ハディーヤ語の動詞文において、動詞の活用によって、主語が特定できるため、主格人称代名詞は明示されても (80)、されなくてもよい (81) ようである。

(79) an k'eeraa?la (H: 274)

私 背が高い  
「私は背が高い」

(80) an koyy-ina hurbaata uww-ummo (K: 118)

私が 客-に 食事 与える-単純完了(1.sg.)  
「私が客に食事を与えた」

(81) bic'-inne beeto app'is-ummo (K: 118)

杖-で 少年 叩く-単純完了(1.sg.)  
「私が杖で少年を叩いた」

名詞と形容詞の語順に関して、Hudson (1976: 275) と Stinson (1976: 153) によれば、形容詞が先に来るといふ。その際、形容詞が名詞の性と数と一致することはないと指摘している。

また、Hudson (1976), Stinson (1976), Plazikowsky-Bauer (1960) のデータを見ると、指示詞と名詞では、指示詞が先に来ているのが分る。ちなみに、Hudson (1976: 252) は女性名詞の複数形が文法的に単数男性形を示す事例を挙げている (85)。

名詞の所有関係に関して、Hudson (1976: 275), Stinson (1976: 153), Plazikowsky-Bauer (1960: 44) によれば、所有者名詞の後に

被所有物名詞がくるという。

(82) k'eraʔl menco (S: 153)

背の高い 男 (sg.)

「背の高い男」

(83) k'eraʔl menna (S: 153)

背の高い 男 (pl.)

「背の高い男達」

(84) ot ganicc (H: 252)

あの (sg.f.) 雌馬 (sg.)

「あの雌馬」

(85) ok gannuww (H: 252)

あの (sg.m.) 雌馬 (pl.)

「あれらの雌馬ら」

(86) miʔn jinjeʔe (H: 254)

家の 床

「家の床」

(87) wallâm adîle (PB: 44)

Wallāmo の 王

「Wallāmo の王」

### 3.3.2 疑問文

Stinson (1976: 154) によれば、疑問文の語順は平叙文のそれと変わらないという。疑問文は平叙文の叙述に疑問の標識 (3.2.4.20) を付加し、イントネーションを上昇させることによって表される。ただし、イントネーションは上昇させるだけでなく、最後に急下降させるという。イントネーションの音響データを示していないため、詳細は不明である。

### 3.3.3 不定形の文

Stinson (1976) によれば、不定形はハディーヤ語において名詞

として使われたり、動詞の補語として使われるという。以下に Plazikowsky-Bauer (1960) と Hudson (1976) の不定形の文を示す。(88) は名詞の事例であり、(89) は動詞の補語の事例である。動詞の補語として不定形が使われる時、不定形は動詞の前に置かれる。

(88) lell-im            iitt-oommo (H: 273)  
遊ぶ-不定    好む-現在・未来 (1.sg.)  
「私は遊ぶことを好む」

(89) kak            gúll-imo            wār-ûko (PB: 76)  
これらを全滅させる-不定    来る-過去 II (3.sg.m.)  
「これらを全滅させるために、彼がやってきた」

### 3.3.4 関係節

動詞文が関係節を形成して、名詞を修飾する時、動詞文+名詞という順番になる。

(90) it-um                            hurbaat (H: 270)  
食べる-単純過去(1.sg.) 食事  
「私が食べた食事」

(91) laʔ-ukko-k                            lossanco (S: 154)  
知る-単純過去(3.sg.m.)-関係 生徒  
「彼が知っていた生徒」

(92) wār-ôk                            mánčo (PB: 72)  
来る-現在・未来(3.sg.m.) 男  
「やって来る男」

(93) wār-âko-ki                            mánčo (PB: 72)  
来る-過去 I (3.sg.m.)-関係 男  
「やって来た男」

(94) wó'ó ínkir-o mánčo (PB: 72)

水 飲む-関係 男

「水を飲む男」

#### 4 問題点

音声学的・音韻論的な問題として次のようなものがある。① Hudson (1976: 247) は、閉音節の環境で /i/ は [i]、/e/ は [ɛ]、/a/ は [ə]、/o/ は [ɔ]、/u/ は [u] として実現するというが、その見解は妥当なのだろうか。音響音声学的に母音のフォルマントを解析し、その妥当性を検証したい。② Sim (1988) は 3 子音が連続する事例の 1 つとして -ddd- を挙げ、その時間長を計測したが、その時のスペクトログラム、音圧、隣接母音のピッチがどうなっているのか不明である。③ また、Sim (1988: 86) は -nt'd- が音声的に [nʔd] であるというが、語中の放出音がどのような音声的実態を伴うのだろうか。語頭と語末の放出音を含め、語中の放出音の音響的特徴を記述したい。④ ハディーヤ語ではアクセントが弁別的に働く事例がないためか、アクセントの研究がほとんど見られない。アクセントを含めたプロソディーの記述を行わなければ、ハディーヤ語の音声記述は不十分なものと言えるだろう。高低アクセントの記述を含め、ハディーヤ語の分節音の持続時間、ピッチ、音圧などを音響音声学的に調査する必要がある。これによって、ハディーヤ語の音声学的アクセント<sup>11</sup>の記述を行いたい。⑤ Hudson (1976: 248) によれば、šókkisúkko のように、音節の母音が長母音である時、あるいは音節が閉音節の時、それらの音節にストレスが置かれるという。しかし城生 (2008: 134) によれば、ストレスは 1 単語内に一箇所だけ置かれるという原則があり、第 2 ストレスを認める場合もあるが、Hudson はハディーヤ語に第 2 ストレスを認めていない。このような事例のピッチや音圧などを調査する必要がある。⑥ Stinson (1976) によれば、疑問文のイントネーションは上昇を伴い、最後に急下降するというが、本当に急下降するのかどうかを調査したい。

文法的な問題として、次のようなものがある。⑦ Stinson (1976) だけが複数標識の -uwwa に定性があると指摘したが、その是非

<sup>11</sup> 音声学的アクセントについては、城生 (2008: 127) を参照。

を検討する必要がある。⑧Hudson (1976) は *uggu-ta* の *-ta* が女性標識であると言うが、3.sg.f.の人称代名詞と置き換えられるのかどうかを調査したい。⑨格あるいは後置詞がどれだけ認められるのか不明である。これを解決するためには、格付きの単語単独の例と文中の単語の例を1つ1つ丁寧に記述していく必要がある。⑩Hudson (1976) の主格・対格・与格・属格の人称代名詞と Korhonen et al. (1986b) の対格・属格人稱代名詞において、3.pl.には *itt'*-系と *iss*-系の2つが見られるが、これらの違いが何であるのかの不明である。⑪Hudson (1976) において接続形のパラダイムが挙げられているが、これがどのような時に使われるのか不明であるという問題がある。⑫Plazikowsky-Bauer (1960) は指令形の活用において、2人称の形を示しているが、2人称の指令形が認められるかどうかを調査したい。⑬Plazikowsky-Bauer (1960) は現在・未来動名詞において男性と女性だけでなく、中性も認めているが、それが認められるのかどうかを検討したい。⑭Plazikowsky-Bauer (1960) を見ると、継続形では *-la* が付加されるが、「言う」の1.sg.の継続形では *-la* が付加されていなかった。この違いは何によるものなのか不明である。⑮Plazikowsky-Bauer (1960) は否定形において、否定単純完了形と否定現在完了形が同じであるとするが、本当にそうであるのかを調査したい。

## 5 調査方法

今回、協力を得たインフォーマントは BL 氏 (男性) である。調査時点 (2009年12月から2010年1月) で42歳であった。彼はエチオピア連邦民主共和国のギムビチュ (Gimbichu) で生まれ、言語形成期もギムビチュで過ごした。現在、インフォーマントはハディーヤ・ゾーンの中心都市ホサンナで生活している。ギムビチュはホサンナから西に30km離れたところにある町である。彼の両親もハディーヤ語母語話者であった。現在、インフォーマントはホサンナの町においてハディーヤ語とアムハラ語を主に使用している。

今回、アジア・アフリカ言語文化研究所 (1979) で挙げられている基礎語彙表を中心に単語の録音を行った。ただし、調査の途中から名詞の複数形を聞いたり、動詞の色々なパラダイムを聞いたりして、それらの録音も行った。さらに、調査した単語



から文を組立てて、ハディーヤ語の文も若干、調査・録音した。

録音データは2009年12月28日から2010年1月8日にホサンナで得たものである。録音は静穏な部屋で行った。録音機 Edirol R-09HR (Roland 製) にダイナミックマイクロフォン SM58SE (Shure 製) を接続、Wave 形式にてファイル化した。サンプリング・レートは取り込み時点で44.1kHz、量子化16 bit。モノラル録音を行った。

インフォーマントにはあらかじめ英語で書かれた単語を見せ、その単語の意味を正しく理解しているかどうかを確認した。その上で、ハディーヤ語の発話をしてもらった。録音は単語を発話してもらったが、必要に応じて、キャリアセンテンスを用いた文で行った。キャリアセンテンスに用いた文は ku sagar had'i:na \_\_\_\_\_。「この単語はハディーヤ語で \_\_\_\_\_ です」である。

## 6 社会言語学的調査

2007年の国勢調査によれば、ハディーヤ・ゾーンのハディーヤ語の話者数は1,243,776(男性618,245、女性625,531)である。また、同ゾーンの中心地であるホサンナ (Hosaina) におけるハディーヤ語の話者数は69,957(男性35,503、女性34,454)である。

インフォーマントによれば、ホサンナにはハディーヤ語母語話者だけでなく、アムハラ語母語話者、カンバタ語母語話者、グラゲ語母語話者、ウォライタ語母語話者も見られるという。

柘植 (1992: 181) はハディーヤ語について「固有の文字はもたず、採集されたテキストのほかには、今のところ、書かれたものとしては、聖書の部分訳があるだけである。これは、エチオピア文字で表記されている」と指摘しているが、今回の筆者の調査によって、ハディーヤ語は音声言語としてだけでなく、文字言語としても運用されているということが分かった。使用文字はラテン文字である。ただし文字言語として運用されていたのは、確認した限り、学校の教科書だけであった。今回調査に協力していただいたインフォーマントのBL氏の話しでは、1992年以降、学校のあらゆる教科が7歳から11歳までにおいてハディーヤ語で教えられるようになったという。ちなみに、ハディーヤ・ゾーンにおいて、アムハラ語の教育は10歳からはじまり、英語の教育は12歳からはじまるという。BL氏からは調査中に

*Hadiyyi su'm losano* 『ハディーヤの言葉のレッスン』という教科書 (8 歳用) を見せてもらった。将来的には、このような教科書のハディーヤ語も調査していきたい。

## 7 おわりに

本稿の目的は、先行研究の記述内容を検討し、ハディーヤ語の記述の問題点を述べることにあった。もう 1 つの目的は、筆者自身がホサンナで行った社会言語学的調査内容を報告することであった。

第 3 節では先行研究が記述した音声・音韻、名詞や動詞といった文法の一部をまとめた。疑問詞や接続詞などは今回挙げるができなかつたので、それらについては別稿で示したい。

今後、先行研究の問題点を解決しながら、収集した音声データを一から調査して、ハディーヤ語の音声と文法の記述に努めたい。将来的には、複数の話者からハディーヤ語のデータを収集したり、学校教科書のハディーヤ語の調査も行いたい。

### 【参考文献】

- アジア・アフリカ言語文化研究所 (編) (1979) 『アジア・アフリカ言語調査票』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Crass, Joachim (2005) Hadiyya. In: Siegbert Uhlig (ed.) *Encyclopaedia aethiopica*, vol. 2: 960-961. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Hudson, Grover (1976) Highland East Cushitic. In: M. Lionel Bender (ed.) *The non-Semitic languages of Ethiopia*, 232-277. East Lansing: Michigan State University.
- Hudson, Grover (1989) *Highland East Cushitic dictionary*. Hamburg: Helmut Buske Verlag.
- Hudson, Grover (2007) *Highland East Cushitic morphology*. In: Alan S. Kaye (ed.) *Morphologies of Asia and Africa*, vol. 1: 167-192. Winona Lake: Eisenbrauns.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典：第 6 巻、術語編』 三省堂
- Korhonen, Elsa, Mirja Saksa and Ronald James Sim (1986a) A dialect study of Kambaata-Hadiyya (Ethiopia). *Afrikanistische Arbeitspapiere* 5: 5-41.
- Korhonen, Elsa, Mirja Saksa and Ronald James Sim (1986b) A dialect

- study of Kambaata-Hadiyya (Ethiopia) Part 2: Appendices.  
*Afrikanistische Arbeitspapiere* 6: 71-121.
- 城生 佰太郎 (2008) 『一般音声学講義』 勉誠出版
- Leslau, Wolf (1985) The liquid *l* in Hadiyya and in West Gurage. In: C. Robin (ed.) *Melanges linguistiques offerts à Maxime Rodinson par ses élèves, ses collègues et ses amis*, 231-238. Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner.
- 二ノ宮 崇司 (2008) 「高地東クシ・ハディヤ語の音韻調査」  
*Cushitic-Omotc Studies 2007*. 山口: 山口大学
- Plazikowsky-Brauner, Herma (1960) Die Hadiya-Sprache. *Rassegna di Studi Etiopici* 16: 38-76.
- Plazikowsky-Brauner, Herma (1964) Wörterbuch der Hadiya-Sprache. *Rassegna di Studi Etiopici* 20: 133-182.
- Sim, Ronald J. (1988) The verb in Northern Highland East Cushitic. In: Marianne Bechhaus & Gerst Fritz Serzisko (eds.) *Cushitic Omotic: Papers from the International Symposium on Cushitic and Omotic Languages* (Cologne 1986), 433-452. Hamburg: Helmut Buske.
- Sim, Ronald James (1988) Violations of the two-consonant constraint in Hadiyya. *African Languages and Cultures* 1: 77-90.
- Sim, Ronald James (1991) Hadiyya's other Causative? In: Hans G. Mukarovsky (ed.) *Proceedings of the Fifth International Hamito-Semitic Congress 2*, 49-64. Wien: Veröffentlichungen der Institute für Afrikanistik und Ägyptologie der Universität Wien.
- Stinson, D. Lloyd (1976) Hadiyya. In: M. Lionel Bender etc. (eds.) *Language in Ethiopia*, 148-154. London: Oxford University Press.
- 柘植 洋一 (1992) 「ハディーヤ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 世界言語編 (下-1)』 3: 181-182. 三省堂